

## 追悼 松江寛人先生（ふくしま共同診療所初代院長）

### 福島県民に寄り添い、

### ふくしま共同診療所建設に尽力



本年3月11日、ふくしま共同診療所の初代院長を務めた松江寛人先生が逝去されました。松江先生は1960年、全国の医学部学生自治会で組織された医学連の委員長を務め、安保闘争を中心に闘われました。卒業後は国立がんセンター病院で放射線診断部部長を務め、日本の放射線診断をリードしてきました。とりわけ、日本における超音波検査のパイオニアとして、いまの超音波検査の基礎をつくられました。がんセンター病院を定年してからは、東京都杉並区に「がん相談センター」を開設し、がん患者に寄り添って診療を行っていました。

2011年3月11日、東日本大震災と福島第一原発事故が起きました。福島の有志が、放射能による健康被害から住民を守るためには独自の医療機関が必要だと、福島診療所建設委員会を立ち上げ、私たち医師グループと話し合いながら診療所建設の模索が始まりました。当時すでに70代後半だった松江先生が初代院長を引き受けてくださったご決断により、「ふくしま共同診療所」開設にこぎつけることができました。

昨年3月11日に脳出血で倒れられてから1年間の闘病をへて、今年の3月11日に亡くなりました。享年81歳、まさに3・11の人でした。

当院は、甲状腺エコー検査を保険診療で行っています。開始当初、厚生労働省は「甲状腺エコー検査は健康診断だから保険診療では認めない、自費診療だ」と言ってきましたが、松江先生は「福島県民は原発事故で被曝させられている。放射能による甲状腺がんなどの健康被害の可能性が高い。放射能被害という原因があるのだから保険診療による検査が当然」として立ち向かい、保険診療を認めさせてきました。また「小児甲状腺がんを放射能の影響ではない」と主張している福島県当局、県民健康調査検討委員会、福島県立医大ともトコトン対決してこられました。

放射線学会の重鎮である松江先生の口ぐせは「放射能による被曝はゼロしか許されない」でした。松江先生の戦闘性が診療所の精神をつくりました。そしてその精神が、いまの診療所を支えているのです。

松江先生、いままで本当にありがとうございました。先生の精神を引き継いで、放射能による健康被害に苦しんでいる人々に寄り添い、今後も診療を続けていきます。安らかに眠りください。合掌。

ふくしま共同診療所院長 布施 幸彦

写真左：甲状腺検査の結果を説明する松江先生。的確な診断と、丁寧な説明に患者さんから厚く信頼された。

写真右：海外メディアの取材を受ける松江先生。



## 追悼のことば

松江先生が3月11日に天国へ召されたと知って、福島診療所建設委員会の打ち合わせで、初めてお目にかかった時のことが頭に浮かびました。3・11があつて、福島に来られ、3・11に旅立たれるとは何という巡り合わせでしょうか。医者として福島のために、最後までご尽力頂きましたことに感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

福島診療所建設委員会代表 佐藤幸子

いわき市で行われた講演会で、松江先生が放射線の専門家として「福島のお母さんたちが不安に思うのは当たり前なんです」と話されたことが、今でも心に残っています。子どもたちの甲状腺も丁寧に検査していただきました。3月11日に亡くなられた



報道ステーションでの特集（14年3月11日放送）。甲状腺に蜂の巣のような無数の微小のう胞を発症している子どもが増えていくことに警鐘をならした。

と聞き、最期まで私たちに「黙るな」と伝えてくださったのかなと思います。ご冥福をお祈りします。

患者 S（福島市から避難し、仙台市に在住）

## ミスター100 ミッシェルベルト 山下俊一がまたも福島に

3月、かの山下俊一教授が福島県立医大の常任副学長に復帰することが発表されました。山下氏といえば、原発事故直後に福島に送り込まれ、「放射能はニコニコしている人のところには来ません」「100 ミッシェルベルトまでは心配ありません」と講演してまわり、「ミスター100 ミッシェルベルト」と呼ばれた人です。環境省、県当局とも密接に連携しながら県民健康調査検討委員会でも開会前に秘密の準備会を主導するなど「安全キャンペーン」を取り仕切ってきました。

しかし政府に対しては「チェルノブイリでは放射能の影響を認めたために国の財政がつぶれた、それを繰り返してはならない」と言い、しかもチェルノブイリ（日本財団の資金で送り込まれていた）で放射能の影響を認めた論文を書いていたことを国会事故調査委員会から指摘されて「覚えていない」と居直りました。

そのため、県民の総スキャンを受け、表舞台からは姿を消していました。勿論、裏ではいろいろ糸を引いていたのですが。

昨年秋に強行された県民健康調査検討委員会、甲状腺評価部会の委員の入れ替えを合わせて考えると、政府と福島県が、いよいよ検査を中止させようとしている疑いが浮かんできます。そのために、名うての御用学者で固めたと思えませんが、県民の反発は分かり切っているのに、そうしなければ旧来の県民健康調査検討委員会では「放射能の影響とは考えにくい」を維持しきれない状況にあるのではないのでしょうか。今年3月の県民健康調査検討委員会でも、新たに委員となった高野氏が、「過剰診断だ」と声を荒げています。

政府のウソと被曝強制を打ち破ることのできる情勢とも言えます。しかもこれから本格的に大人にも子どもにも大量の健康被害が現れる危険がある中で、「ふくしま共同診療所」を地域の拠点としてますます発展させなければなりません。